

虚血性大腸炎

●虚血性大腸炎とは？

虚血性大腸炎とは、腸に血液を送っている血管の障害により大腸粘膜が虚血となり、大腸粘膜に浮腫、発赤、びらん、潰瘍などができる疾患です。このため、突然の激しい腹痛、下痢、下血などが起こります。50歳以上の高齢者に多くみられる疾患でしたが、近年は若年者にも増えてきており、便秘や排便のいきみなどの関与が大きいといわれています。

●誘因・原因

①便秘やいきみ

便秘になると、腸は激しく運動して、硬い便を押し出そうとします。大腸内の圧力が高まると、腸管内の血管が伸びて細くなり、血流が減少します。その結果、腸管組織が酸素不足になって、壊死することがあります。このため、虚血性大腸炎は、高齢者だけでなく、便秘傾向である若い女性などにもみられます。

②動脈硬化

この病気のもっともな原因は「動脈硬化」です。腸の周辺には、腸に栄養や酸素を運ぶ血管が張りめぐらされています。この血管に動脈硬化が起こると、血管が狭くなったり、詰まったりして腸に十分な血管が送られなくなります。すると、腸の組織は酸素欠乏となり、一部が壊死してびらんや潰瘍を生じます。虚血性大腸炎は高齢者に多くみられますが、これは加齢とともに動脈硬化が進んでいるためです。その他、高血圧、糖尿病、脂質異常症、心臓細動、心臓弁膜症など既往歴がある方にも起こりやすいといわれています。

●症状と診断

突然の激しい下腹部痛（多くは左下腹部）とそれに引き続く下痢、下血などがみられます。診断の第一選択は、内視鏡検査です。内視鏡検査では、大腸の粘膜に浮腫、びらん、粘膜下出血、縦走傾向（帯状の発赤）がみられ、左側の大腸（下行結腸、S状結腸）に多く発生します。急性期では、S状結腸や、下行結腸にその他の出血をきたす腸炎（大腸癌、感染性腸炎、潰瘍性大腸炎、クローン病、大腸憩室炎、薬剤性大腸炎など）を除外することで診断されます。

●治療法

一過性の場合は1～2日間ほど絶食して、腸を安静にします。同時に点滴で水分や栄養を補給します。多くは、保存的治療（安静、絶食、点滴、抗生物質など）により、1週間程で症状が治まり、3週間以内にもとの正常な大腸に回復し、外来での通院治療が可能です。しかし、腹痛の症状が強く、下血の量や回数が多い場合は、入院治療が必要となる事もあります。また、大腸の狭窄が高度の場合や壊死型では手術が必要となる場合があります。

●予防法

- ・便秘は、虚血性大腸炎のリスクとなります。生活習慣を見直し、食物繊維の摂取、十分な水分摂取、適度な運動を心がけ、日ごろから便通を整えましょう。
- ・虚血性大腸炎の多くは動脈硬化を基礎に起こります。高血圧、脂質異常症、糖尿病などがある場合は、まずその治療を十分に行い、これらの病気をコントロールすることが大切です。